

氏名	高野 宏
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4030 号
学位授与の日付	平成 21 年 9 月 30 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	大田植の習俗に関する地理学的研究 —広島県・備後地方を中心として—
学位論文審査委員	主査・教授 内田 和子 教授 北村 光二 准教授 北川 博史 准教授 藤井 和佐 昭和女子大学教授 田畑 久夫

学位論文内容の要旨

本論文は、中国地方の農耕習俗とされる大田植について、近代の備後地方の事例分析から、それが単なる稲作儀礼ではなく実施地域の社会構造や産業構造を反映して、畜産業の振興や牛飼育農家の救済、同族集団から成る社会構造の維持・強化をはかる目的であったことを明らかにしたものである。本論文は序論(3章)、本論(3章)、及び結論から成り、その概略は以下の通りである。

序論(第1章 問題の所在と本研究の目的、第2章 大田植研究の成果と課題、第3章 本研究における視座)では、これまで古くから農民によって定期的に行われてきた、豊作と農耕牛馬の安全を祈願する稲作儀礼とされた大田植の研究を整理して、本論文の目的と意義を導き出している。すなわち、これまで大田植に関する研究は民俗学や芸能史分野から儀式の順番や内容、音楽や舞踊の芸能を明らかにする研究が行われ、それが実施される地域に着目した研究はほとんどなかった。しかし、近代における備後地方での事例をみると、これまでの研究成果からは説明できない諸点がみられ、祭りを実施する地域、とくに社会構造と産業構造の解明によって近代の大田植の意義や地域的差異が説明されると考えた。

本論 第1章 広島県豊松村下豊松川東地区の大田植

本章では、「名」と称する荒神を祀る同族組織が発達する地域においては、近代においても同族集団のリーダーが同族組織に代表される地域の社会構造の維持と強化を目的に大田植を行っていたことを明らかにした。

第2章 広島県比和町森脇の大田植

本章の森脇地区においては、近代における鉄山業の衰退とともに富裕層である鉄山業者

がなくなり、畜産業の振興にともなって急激に需要が増し、新興の有力者となった獣医が大田植を主催するようになったことを明らかにした。

第3章 広島県西城町八鳥の大田植

本章では、畜産業の振興により富裕層となった牛の飼育農家（愛牛家）が牛の死亡などの不慮の事情で経済的危機に陥った際に、彼らと密接な関係を有する家畜商が地域住民から寄付金を集めて、飼育農家の救済のために大田植を開催することを明らかにした。

結論

本論文では、これまで稲作儀礼の一つとして、民俗学や芸能史分野から儀礼や芸能の研究が行われてきた大田植について、広島県備後地方の近代における3事例の分析を行った。その際、これまでの研究では着目されなかった地域社会の社会構造や産業構造すなわち、社会的基盤や経済的基盤を中心に分析を行い、大田植が社会的に担っていた意味や機能を考察しようとした。

その結果、近代における大田植は、開催される地域社会の様態に即して、個別の社会的、経済的意義を有していたことが明らかになった。そして、それらの背景として、近代における中国地方中山間地域の畜産業の発展が大きな影響を及ぼしていることも明らかになった。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は平成21年6月26日（金）に、学内審査員4名と学外審査員として昭和女子大大学院・田畑久夫教授を迎えて行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、これまで民俗学や芸能史の分野から、伝統的な農耕儀礼として多くの研究が行われてきた大田植に関し、地理学分野から、それが実施された地域の社会構造や産業構造との関連を中心にして分析を行ったものである。これまでの研究により、大田植の儀礼の順番や所作、音楽や舞踊の芸能は明らかになったものの、その習俗がみられる地域社会との関連は分析されてこなかった。本論文では、近代における大田植の主催者が地域によって異なることに着目し、同時代における大田植は実施される地域毎の異なった社会構造や産業構造を反映しているものであることを明らかにした。また、近代に大田植が行われた地域すなわち中国地方の中山間地域では、牛の飼育を中心とする畜産業の隆盛と鉄穴流しによる鉄山業の衰退が共通的な経済的背景として存在していた。特に、畜産業は近代以前から見られるが、近代には政府の施策を受けていっそう盛んになった。こうした背景の下で、着飾らせた体格の良い牛を使って代掻きの技巧を競う大田植が、実施地域でもっとも大きな経済力や同族集団の結束力をもった主催者が、地域への利益の還元、牛飼育農家の救済、地域の社会構造の維持・強化、地域の畜産業の安定化などの目的をもって行ったことが明らかになった。

したがって、本論文は、大田植が農民による豊作と農耕牛馬の安全を祈願して定期的に

行われた古くからの農耕儀礼であるとする従来のとらえ方とは、まったく異なった大田植の目的と意義を、実施された地域社会との関連で明らかにした点で高く評価される。

しかしながら、審査の過程では以下のような指摘もあった。・地域の大変革が起こった近代での大田植の実態は明らかになったが、それ以前の実態は推測の域を出ない。・既往の研究の整理では民俗学的研究はよく網羅されているが、地理学分野からの研究が少ない。・聞き取り調査の精度やインフォーマント自身に関する情報について、客観性や信頼性を十分に検討する必要がある。・地域、地域社会、社会組織、同族集団などの用語の定義を明確にして使用する必要がある。・大田植の実施されたローカルな地域とともに、備後や安芸といったより広いリージョナルな視点も必要である。・題目は地理学より文化地理学研究と限定した方が適切である。

以上のように、本論文にはいくつかの課題や問題点は残るが、それらは本論文の価値を損なうものではなく、全体としては従来 of 民俗学的研究にインパクトを与える論文として高く評価される。そのため、本論文は学位論文として十分、認定できると審査員一同が一致して判断した。